

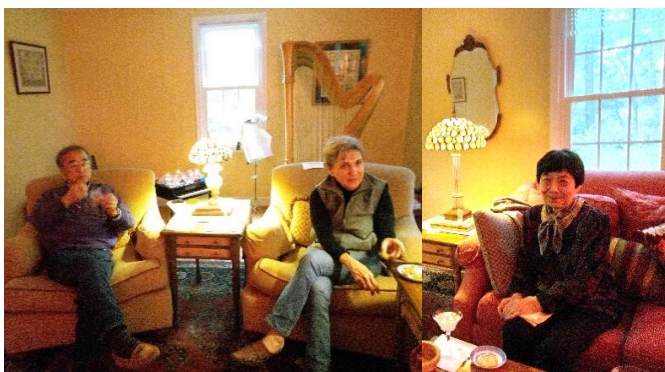
9月22日(金) 午後にフェアヘイヴン★からサンドウィッチ★に参りました。そこにホストのご夫人ナンシーさんがお住まいです。サンドウィッチから大西洋に突き出ている半島がケープ・コッド岬で、岬の南の島がマーサズ・ヴィニヤード島★です。ナンシーさんがサンドウィッチにお住まいでしたから、稲垣さんの調査の旅の最終目的地マーサズ・ヴィニヤード島も目と鼻ということになりました。

サンドウィッチは人口2万余りの町ですが、1637年に入植が始まり、ケープ・コッドでは最古の町で、今も「古き良き時代の町並みを残している」と言われています。



鬱蒼とした木立の影に住宅がチラホラと見えて、その奥まったところにお宅がありました。やはりコロニアルスタイルでした。まずは2階の部屋にスーツケースを運び入れてから、下のサロンでカクテルを頂きながら、ご挨拶を交わしました。ナンシーさんは「ミシガン生まれで、父系はフィンランド人、母系はフランス人。大学で音楽を専攻し、卒業後すぐに結婚、28歳の娘がいる。ロースクールで勉強して、弁護士に。また、公衆衛生の修士号を取得し、現在は医療部門の監査官として勤務」と、市沢氏から紹介を受けていました。優秀な経歴に圧倒されるおもいでしたが、お会いすると、淑やかで、親しみやすい、美しい方でした。サロンは夢見心地になる

ような、スタンドや、シャンデリアが輝いていました。すべてナンシーさんの手作りとのことでした。サンドウィッチの伝統工芸である色ガラス、また海辺の町の多種多様な貝殻をモチーフにしたものです。このような作品を手作りするという事は、繊細で、緻密な努力家である証でしょう。



また、ご夫妻は毎日午後に、カクテルを片手に、お話を楽しむのが日課とのことでした。カクテルはウォッカをベースに様々なジュース、リカーを加え、工夫しておられます。おつまみのピクルスも御手製でした。静かで優雅な時間を大切にしておられるようでした。ご夫妻はともに伴侶に先立たれ、再婚カップルです。日本人は I love you を言い慣れていないため、ナンシーさんはご不満らしいと聞いていましたので、「一日に何度言ったらいいでしょうか」とお尋ねすると、真っ赤になって、小さい声で「一回」と答えられました。「そんなはずはない！」と私が言うと、市沢氏はナンシーさんを抱き寄せて、I love you と何度も言って、みんな大笑いでした。

私が「ニュー・イングランドにとっても興味がありました。来られて本当に嬉しいです。ニュー・イングランドそのものを感じたい」と言いますとナンシーさんは「ここです」と言われました。彼女自身、ニュー・イングランドの歴史、伝統、雰囲気が入り込んで離れがたいようです。

私が「ニュー・イングランドにとっても興味がありました。来られて本当に嬉しいです。ニュー・イングランドそのものを感じたい」と言いますとナンシーさんは「ここです」と言われました。彼女自身、ニュー・イングランドの歴史、伝統、雰囲気が気に入って離れがたいようです。